

複合動詞の意味と構成

——「ゝダス」・「ゝアゲル」を中心に——

田 辺 和 子

日本語を学習する外国人の多くが複合動詞に直面する時、その結びつきにおける何らかの規則や少なくとも基準となる指針を要求してくる。この疑問に答えるべく、語構成、語彙の分野での処理にとどまらずに複合動詞の補助動詞化した後項動詞の第二次的アスペクトとしての役割を中心に分析を試みた。さらには、ある動詞がいかなる動詞を後項動詞として接合するか、そして接合した際にいかなる意味を持つかを考えることによって、外的言語環境によって浮きぼりにされる動詞に内在するさまざまな性質（以後「活性」と呼ぶ）について明らかにしてみた。

分析の対象とするのは、それぞれ単独で使うことのできる動詞の組み合わせで、形としては「動詞の現在分詞（いわゆる連用形）＋動詞」とする。

アスペクト、すなわち「動作の展開の諸相」を表す文法形式には次の三種がある。（寺村、一九八二）

- 一、動詞の活用語尾 ル と タ
- 二、動詞のテ形に後接する補助動詞

（テ）イル・（テ）アル

三、動詞の連用形に後接する補助動詞

（動キ）ハジメル、（走り）ツツケル、（降り）ダス、（動キ）カケルなど

ただし、三に關しては、どの程度までアスペクト表現として認めるかは諸家によって意見が異なり（吉川、一九七三、p.162）、接合範疇も一や二に比較して制限があるので「第二次的アスペクト」と呼ぶことにする。（寺村、一九六九）。この第二次的アスペクトで問題になるのは、「ゝハジメル」「ゝツツケル」などのような動作の一過程のうちのどの時点かを直接に示す言葉は別として、「ゝダス」「ゝカケル」などは、後項動詞がアスペクトの意味を持つ場合とそうでない場合があることである。

例えば、「ロケットを打ちあげる」では上方へ動きを表すが、

「原稿を書きあげる」では、製品の完成という一種のアスペクトを表している。（複合動詞は）、こういうことに注意してとりあげるべきだ。（吉川、一九八二）

この事実を考慮して、表Ⅰ「意味のプリズム表」を作成した。「意味のプリズム」という言葉は国広哲弥氏が『意味論の方法』の中で

表I 「～ダス」と「～アゲル」の意味のプリズム表

		～ダス		～アゲル	
空間移動 ▲	A	押シダス・投ゲダス 蹴リダス・打チダス 取リダス・吹キダス 追イダス・飛ビダス 吸イダス・振リダス 盗ミダス・書キダス		B	押シアゲル 投ゲアゲル 吹キアゲル 振リアゲル 取リアゲル 持チアゲル
	C	C ₁	C ₂	D ₁	編ミアゲル 洗イアゲル 描キアゲル 作リアゲル 織リアゲル 染メアゲル 彫リアゲル 磨キアゲル 煮(エ)アゲル 築キアゲル 炊キアゲル
	E	E ₁	E ₂	D ₂	勤メアゲル 鍛エアゲル 歌イアゲル 習イアゲル 書キアゲル 読ミアゲル 数エアゲル
	F	座リダス・入リダス 死ニダス・落チダス 消エダス・散リダス 止マリダス・生マレダス			
時間移動 ▼	G	着ダス 殺シダス 落シダス 倒シダス 飾リダス 消シダス			

「カケル」という動詞の多義の連続性に関して付けた名称である。「声をカケル」↓「立てカケル」↓「ぬがねをカケル」という「カケル」の変化は、対象物との接触時間の連続的变化によって、「カケル」

の多義的分岐が起ることを説明している。以上のように意味変化に流動性の含みを持たせた考え方をここでも取り上げたい。

一、「しダス」における考察

表Iは、空間的移動の意味から時間的移動、すなわち第二次的アスペクトの意味を持つ補助動詞への移項の連続性を示した表である。

A・Bグループはともに空間的移動であるが、Aは内から外への動きに対し、Bは下方から上方への動きである。さらに、A・Bに共通する前項動詞の多くが（例・押ス・投ゲル・吸ウ等）、「しコム」などとも結びついて空間的移動を示す複合動詞となる。これらの動詞に内在する活性を方向性・指向性と定める。（E・J. et. 鈴木孝夫訳、一七九〇）

Cグループは、空間移動と時間移動のちょうど境目に位置する複合動詞と考えられるが、顕在化を表す効果を持っている。顕在化とは対象を外部や表面に出現させ、人の目に触れさせることを意味する。（姫野、一九七七、p84）ここではさらに二つに分類した。C₁グループは、特に創出効果が高いものである。この創出性とは、人が何らかの手段で無の状態から何かを生じせしめることである。後で詳しく触れるが、このC₁グループは、動作の完了を示す「しアゲル」と共通なものが多い。C₂グループは、いままで存在していながら人の知覚に触れなかった対象を何らかの手段を使ってその存在を明らかにする出現効果を持つグループである。C₁もC₂も共に「しダス」との接合によって動作の結果において動詞が条件付けられる特色を持っている。この結果において動詞を条件付けるというのは、ある動作をただ単に行なうだけでなく、その動作によって導き出される結果もその動詞を使う上での必要条件とされるということである。

(1) 田中さんは、解決策を考えた。

(2) 田中さんは、解決策を考え出した。

(1)は、解決策が最終的に得られなくても使えるが、(2)は、解決策が何らかの形で見だされていなくてはならない。C₁グループの他の動詞、例えば「描ク」「洗ウ」などにおいては、上記の(1)(2)の例文ほどの差異は見られないが、これらの動詞は、本来結果において条件付けられている活性があり、「しダス」との接合によりその活性がより強固なものになったと考えられる。ただし、これらの動詞が従来非結果動詞に分類されてきたことからわかるように、動作の過程の段階に関する対象語をとる時、結果において条件付けられる活性は現れない。

(3) 彼らは中東問題を考えた。

(4) 彼らは中東問題を考え出した。

(4)の場合「考え出す」は「考え始める」とほぼ同様な意味は解決できる。つまり、(1)(2)(3)から「考える」という動詞が一動作の時間の流れに対してかなり広範囲にわたって使用できることがわかる。ここで、創出性を再定義すると、ある材料や素材に動作及び技巧による変形を加え、その結果何らかの生産物・創出物ができるという、過程と結果を意味する活性である。そして、特にこのC₁グループを「創出動詞」と呼ぶことにする。

Eグループは「しダス」と接合して動作の開始を示す効果を持っているグループで、「発動」のグループとする。E₁は一般的な動作性動詞であるが、E₂は従来の結果動詞と呼ばれている動詞のうちの漸次性を持っているものである。この漸次性とは、「ダンダン・マス・マス・次第二」といった副詞と共に起し、漸進相を示す「テクル」

「テイク」「ツツアル」といったアスペクト形式と結びつく活性である(仁田義雄、一九八二)。

F・Gグループは、ともに複数主体によって同一動作が連続して行われる現象の開始を示している。

- (5) 海外で多数の試験管ベビーが生まれ出した昨年初めあたりから……。

(「読売」夕、一九八二・三・二八)

Fグループは、従来瞬間動詞に分類されていた動詞群であるが、これらの瞬間動詞に「ハジマル」が接合すると、一連の動作の反復くりかえしを表すことは吉川氏がすでに指摘している(吉川、一九七三、p181)。氏は継続動詞が「ハジメル」を伴って動作の開始を示す特徴に触れ、「立ち始める」「起き始める」が複数主体の動作の反復になるので継続動詞とはちがうと述べている。しかし、その他にも従来は継続動詞として分類されていたり、又は結果動詞とも非結果動詞とも解釈できるGグループも「ハダス」・「ハジメル」と接合してFグループと同じ効果を持つことがわかる。藤井氏は、継続動詞の中の結果動詞として次の例をあげている。(藤井、一九七三、p109)

〔花が〕散ル」「垂ル」「来ル」「行ク」「着ル」等

これらは自動詞が多いことから動作の対象ではなく、あくまで主体の移動や変化結果には着目し、「結果動詞」としている。主体の変化結果か対象の変化結果かということにかかわらず、「ハダス」と接合して複数主体の同一動作の連続という表現効果を出すか否かという点だけに着目すれば、上の例の他に、「殺ス」「落ス」「倒ス」「飾ル」「消ス」などのGグループも、瞬間動詞であり結果動詞であ

るFグループと類似した活性を持ち合わせていると考えられる。例えば「殺ス」は相手の死という状態をもって初めて使用可能となり、「落ス」も物体が地面に着くことが条件となるといった具合である。すなわち、これらは対象の結果に条件付けられており、藤井氏の言う結果動詞が主体結果動詞だとするならば、これらは対象結果動詞として考えられるだろう。さて、これらの対象結果動詞を「ハダス」との接合において考察すると、次の様になる。

- (6) その精神異常者は、(次々と)人を殺し出した。

- (7) 戦闘機は町の中心をめがけて突然爆弾を落し出した。

- (8) 十二月になって(人々は)クリスマス・ツリーを飾り出した。

(6)では「次々と」という副詞によって、(8)では「人々」という複数の主体によって「ダス」の同一動作の連続を表わす効果が出ているのであって、前項動詞の活性に拠るものではないとも考えられるが、これらの副詞や複数主体は、動詞自体が複数主体を必要とするにもかかわらず、日本語には複数形という形態的なカテゴリーがないことによって(吉川、一九七三、p194)、動詞によって必然的に導き出された結果と考える方が適當である。なぜなら、EグループとF・GグループにおいてEグループの動作主が複数化する「ハダス」の効果はF・Gグループと同様に同一動作の連続となるが、F・Gグループは、けっしてEの発動の効果(同一動作主の同一動作過程の開始)は持ち合わせないからである。ただし、「飾る」は、動作性動詞としてもよく使われる。

- (9) 花子は、その本を読み出した。

- (10) 人々は、その本を読み出した。

(11) 突然、おもちゃが動き出した。

(12) 突然、おもちゃが次々と動き出した。

(10)は、(9)の主体を複雑化したもので、(12)は(11)を副詞によって主体を複数化したものであり、それぞれ(9)・(12)の文は、状況に応じて使うことができる。しかし、

(13) その病人は、今、死に出した。(?)

(14) 賢治は京子を殺し出した。(?)

というように、F・Gグループの複合動詞を使った文の主体を単数にすることは不自然である。したがってF・Gグループの「ゝダス」の効果を前項動詞の活性によるものとすれば、瞬間動詞のFだけでなくGグループもEグループとは別の活性を持った動詞と考えられる。

「ゝダス」における考察の最後に、発動の「ゝダス」とれこれと類似した効果を持っている「ゝハジメル」とを比較してみたい。

「泣く」「笑う」は、「ゝダス」のみに接合する。これは、「ゝダス」の方が突発性が強く、より自然発生的なものに使うことが多いからである。(寺村、一九六九、p 46)

(15) 十人が教室内の机やイスをメチャメチャに移動させたり、振り上げたりして暴れ出し、床を滑ったイスが藤井教諭の左足にあたった。

〔読売〕朝、一九八三・四・七

(16) とたんに走馬灯なら風を得てまわり出す

(今岡井欣三郎『日本の美字』)

(16)も「ゝハジメル」に置き代えても誤りとは言いにくい。しかし、(15)は、状況から考えても、「暴れる」という動詞の意味から考

えても、突発性の高い「ゝダス」のほうがしっくりいく。また、(10)は、「とたんに」という副詞があることから見ても、「ゝダス」のほうが適当である。

二、「ゝアゲル」における考察

Bグループの説明は、一、「ゝダス」における考察でA・B一緒に取り扱ったので特にここでは触れない。

Dグループは、動作の完了・貫徹を示した複合動詞群であるが、C₁と比較すると共通なものが多いことがわかる。(C₁のグループとは創出性を内在させる創出動詞である。)そこで特に、これらC₁と共通なものをD₁としてまとめ、D₂をそれ以外のものとした。C₁の動詞群がD₁にもほとんどあてはまる理由としては、「ゝアゲル」も「ゝダス」も結果において動詞を条件付ける効果があるためと考えられる。そして、さらに、これらは次の様な現象によって証明できる。

(17) ○毛糸を編む

×毛糸を編み上げる

(18) ○セーターを編む

×セーターを編み上げる

(19) ○米を炊く

×米を炊き上げる

(20) ○御飯を炊く

○御飯を炊き上げる

つまり、創出動詞が「ゝアゲル」と接合したことによって対象物の名詞に制限が生じることがある。これら対象物の関係は、「材料と生産物」、あるいは「素材と作品」であり、材料・素材の名詞が「ゝ

「アゲル」と一緒に使えないことになる。(姫野、一九七六、p 98)
「編む」「炊く」など「 \rightarrow アゲル」と接合せずに単独で動詞が使用されていた場合には、動作の過程全体に視点が置かれていたが、「 \rightarrow アゲル」との接合によりその視点が動作の結果に置かれるようになったため、例文(11)・(13)のように素材の対象物が「 \rightarrow アゲル」とは結びつかなくなった。

さて、ここでもこれまでの考察をまとめてみると、 C_1 ・ D_1 グループの説明で触れた「ダス」「 \rightarrow アゲル」によって、結果において条件付けられる動詞、またGグループの説明で触れた対象の結果に拘束されている結果動詞の一種と考えられる動詞群には、対象結果拘束性という活性が内在していると考えられる。ただし拘束度には多少の差があり、 C_1 ・ D_1 グループは、動作動詞としてよく使われることにより、その拘束度はGよりも弱いと思われる。そして、これに對し、従来の結果動詞に内在する活性は主体結果拘束性とする。

「 \rightarrow アゲル」における考察の最後に、動作の完了・貫徹を示す「 \rightarrow アゲル」と、これと類似した効果を持っている「 \rightarrow オエル」とを比較してみたい。一般に「 \rightarrow アゲル」は物の完成を示し、「 \rightarrow オエル」は動作の終了を示す。普通「 \rightarrow アゲル」を伴う創出動詞もその動作そのものの終了に話者の関心があり、完成物には興味や関心がない時は「 \rightarrow オエル」に接合する。

- (21) おいしうに煮上げたキンピラゴボウの仕上げに〔毎日〕
朝一九八二、一〇・一八〕
- (22) 国家の概念そのものが「先進国で歴史的につくりあげられたものであつたからだ。(加藤周一、「加藤周一全集」)
- (23) 御飯を炊き終えたら、そのお釜借してちょうだい。

(23)では、できあがつた御飯そのもへより諸者にとって「お釜」が関心事であるので「炊き終える」という表現が出てくる。また、(21)のように「 \rightarrow アゲタ〇〇〇」と連体修飾語で使われることが多いのも「 \rightarrow アゲル」の特徴である。

「 \rightarrow アゲル」と「 \rightarrow オエル」の接合する前項動詞を比較してみると、「 \rightarrow アゲル」の前項動詞は継続動詞の中の非結果動詞であるが、「 \rightarrow オエル」は漸次性のある結果動詞 E_2 グループ以外の動詞とは幅広く接合可能である。ただし、 F ・ G グループに接合した場合は、連続した動作の終了という意味になる。

(22) 全員が座り終えたところで……。

また、継続動詞で非結果動詞の上にも「 \rightarrow オエル」と接合不可能なものもある。

不可能なもの：例 待つ、思う、憎む、

遊ぶ(?)

条件付きで可能なもの：量的な限定を加えると可能になる。

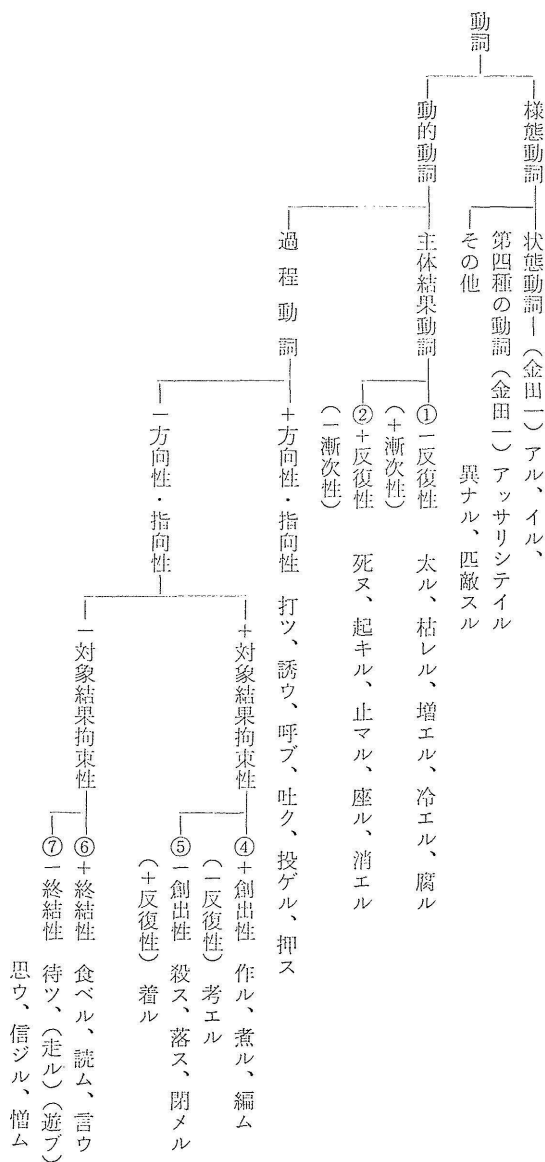
例 走る・泳ぐなど

(23) 箱根までの道15kmを走り終えた。

動詞の意味する行為が客観的に動作の終了点を認知できるか否かという終結点の有無は動詞の活性を考える上で一つの大きな指標となると考えられる。そこで、「 \rightarrow オエル」が接合可能か否かを終結性の有無として定めたい。(仁田氏は、これを「完結性」としている。「日本語学」一一月号、p 41)

以上の複合動詞における考察をふまえて、動詞の活性について段階付けを試みたのが、表II「第二次アスペクトを中心とした動詞の分類試案」である。

表Ⅱ 第二次的アスペクトを中心とした動詞の分類試案

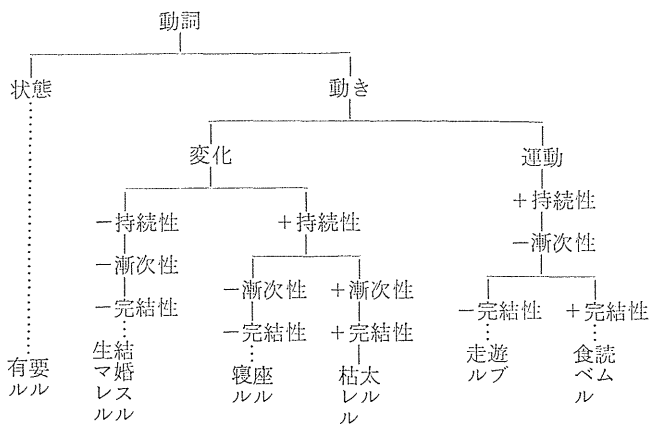


表Ⅱのように動詞の特徴をいくつかあげて、その特徴に段階付けをして動詞を分類することは、従来しばしば行われてきた。しかし、これでは動詞を固定的にしかとらえられない。動詞を固定的にしかとらえられないことは、「十字分類」も同様である。同一グループの動詞群の中でも状況によっていろいろな使い方ができる動詞、すなわち場合によっては他のグループに分類可能なものとしてない動詞とがあるのに対し、イのような「枝分かれ図」、口のよ

うな「十字分類」では分類の枠に終始規制されてしまうことになる。
 本論表Ⅱにおける欠陥を述べれば、主体結果動詞のうちの②グループと過程動詞のうちの⑤グループは、反復性においてプラスを示しているにもかかわらず、初期の段階において主体結果的動詞か過程動詞かと分類してしまったためにこれら二つのグループを近接した動詞群と考えるにくいことである。そこで、一つの動詞にはさまた

参考

イ, 仁田氏による分類



ロ, 吉川氏による分類

状態動詞

--

動作動詞 { 継続動詞
変化動詞
瞬間動詞

結果動詞			非結果動詞		

出現動詞
消滅動詞

表Ⅲ 次的アスペクトを中心とした動詞の活性分析試案

金田一	藤井	動 詞	動 詞 の 活 性							結果拘束性		活性分析による	
			方向性 指向性	終結性	創出性	漸次性	反復性	主体	対象			結 論	結 論
注①	瞬間動詞	太 枯	—	—	—	+	—	+	—	↑	↑	漸次性	↑
		レ	—	—	—	+	—	+	—				
瞬間動詞	結果動詞	冷 エ	—	—	—	+	—	+	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		死 エ	—	—	—	—	+	+	—				
継続動詞	非結果動詞	消 エ	—	—	—	—	+	+	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		座 ル	—	—注	—	—	+	+	—				
継続動詞	非結果動詞	散 ル	—	—②	—	—	+	+	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		止 マ	—	—②	—	—	+	+	—				
継続動詞	非結果動詞	着 ル	—	—②	—	—	+	+	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		割 ル	—	—②	—	—	+	+	—				
継続動詞	非結果動詞	ス	—	—②	—	—	+	+	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		殺 ス	—	—②	—	—	+	+	—				
継続動詞	非結果動詞	落 メ	—	—②	—	—	+	+	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		閉 ル	—	—②	—	—	+	+	—				
継続動詞	非結果動詞	作 エ	—	—②	+	—	—	—	+	結果拘束性	↑	↑	↑
		考 ル	—	+	+	—	—	—	+				
継続動詞	非結果動詞	堀 ム	—	+	+	—	—	—	+	結果拘束性	↑	↑	↑
		編 ム	—	+	+	—	—	—	+				
継続動詞	非結果動詞	食 ベ	—	+	—	—	—	—	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		読 ム	—	+	—	—	—	—	—				
継続動詞	非結果動詞	書 ク	—	+	—	—	—	—	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		走 ル	—	+	—	—	—	—	—				
継続動詞	非結果動詞	泳 グ	—	+	—	—	—	—	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		待 ツ	—	—	—	—	—	—	—				
継続動詞	非結果動詞	思 ウ	—	—	—	—	—	—	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		愛 ス	—	—	—	—	—	—	—				
継続動詞	非結果動詞	悩 ム	—	—	—	—	—	—	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		打 ツ	+	+	—	—	—	—	—				
継続動詞	非結果動詞	投 ゲ	+	+	—	—	—	—	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		吹 ク	+	+	—	—	—	—	—				
継続動詞	非結果動詞	呼 ブ	+	—④	—	—	—	—	—	結果拘束性	↑	↑	↑
		誘 ウ	+	—	—	—	—	—	—				

注 ① 最上段の三つの動詞は、藤井氏の意見によると金田一氏の理論では瞬間動詞の範ちゅうに入らないとしているのでここではブランクにする。

② 連続した動作の終了という意味ではプラスとなるが、この活性は反復性において明示できるのでここではマイナスとする。

③ 条件付きプラス（本文参照）。

④ 方向性・指向性を持つ動詞群における終結性の有無はさまざまである。

まな活性が混然と内在していて複合動詞を構成する際に、接合すべく後項動詞によって前項動詞内の一つの活性が導き出されるという考えのもとに、しかも流動的に動詞をとらえる目的で表Ⅲを作成した。

本論の結論は表Ⅲによってまとめられる。金田一氏・藤井氏の分類を基準にまず動詞を帯状に並べて、さらに本論中で設定した種類の動詞の活性の有無を調べてみた。そして、そこから得られた結果を、最右欄の「活性分析による結論」にまとめた。この最右欄と藤井氏による結果動詞、非結果動詞の分類を比較するとわかるように、結果拘束性という観点を基準にすると、従来の結果動詞よりかなり幅広い動詞が結果拘束性に支配されていることがわかる。また、この結果拘束性は、有るか無いかと単に二分できるものではなく創作動詞を準結果拘束性を持つものとして結果拘束性と非結果拘束性の間に位置づけるのが適当だと考えた。さまざまな活性が複雑に組み合わされて動詞内に存在しているとして、動詞の帯を考えるなら、それは結果拘束性という軸を中心に、漸次性、反復性、創出性、終結性などに少しずつのずれをおこしながら、らせん状に構成されていることになるのである。

〔引用・参考文献〕

- 奥田靖雄「アスペクトの研究をめぐって——金田一「的段階」——」『宮城教育大学国語国文八』昭52、(松本泰丈編『日本語研究の方法』むぎ書房昭53 所収)
- 金田一春彦「国語動詞の一分類」『言語研究』15、昭25(金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 昭51 所収)

『日本語動詞のテンスとアスペクト』『名古屋大学文学部研究論集』(文学4)

(四金田一編 昭51 所収)

国廣哲彌『意味論の方法』大修館書店 昭57

寺村秀夫「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクトその一」『日本語・日本文化』一 昭44、『An Introduction to the Structure of Japanese-Work Book-Book 2』三友社 昭48

「テンス・アスペクトのコトの側面とムード的側面」『日本語学』昭57、12月号

仁田義雄「動詞の意味と構文」『日本語学』明治書院 昭57、11月号

姫野昌子「複合動詞・〜つく」と『〜つける』『同』『〜あがる』と『〜あげる』『同』『〜でる』と『〜だす』『同』『〜かかる』と『〜かける』『同』『〜こむ』『同』『〜きる』と『〜めく』『〜とおす』『日本語学校論集二号〜七号 昭50〜55

藤井正「『動詞+ている』の意味」『国語研究室』(東京大)五(金田一編 昭51 所収)

吉川武時「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『Linguistic Communications』(Monash)大・九 昭48(金田一編 昭51 所収)、『日本語教育におけるテンス・アスペクトのあつかい』『日本語学』昭57、12月号

Leisi, Ernst (鈴木孝夫訳)『意味と構造』研究社 昭35